

(別紙様式第 3 号) (Format No.3)

学 位 論 文 要 旨

(SUMMARY OF THE DOCTORAL THESIS)

氏 名 (Name) 小川 祐生

題 目 (Title) :

犬の口腔鼻腔瘻の疫学的特徴ならびに好発犬種ミニチュアダックスフンドの上顎犬歯歯周病の進行パターン

論文要旨 (Summary) :

口腔鼻腔瘻は主に歯周病による上顎歯列の歯槽骨吸収によって鼻腔と口腔を交通する瘻管が形成される疾患であり、慢性鼻炎様の症状を呈する。海外の報告においてミニチュアダックスフンドが好発犬種であることが示されている。しかし、ミニチュアダックスフンドの犬籍頭数が特に多い本邦における口腔鼻腔瘻の疫学調査の報告はない。また、ミニチュアダックスフンドの口腔鼻腔瘻の好発要因は不明である。

本研究において、口腔鼻腔瘻とその原因となる歯周病の臨床症例を用いた疫学調査を行ったところ、ミニチュアダックスフンドが歯周病および口腔鼻腔瘻になりやすい犬種であることが確認された。主な罹患歯は犬歯であった。ミニチュアダックスフンドと他犬種で口腔鼻腔瘻の年齢に差は認められなかった。臨床症例の治療内容と予後の調査では、シングルフラップやダブルフラップ形成による瘻管の閉鎖は再発が少なく有効な治療法であった。姑息的に歯肉の縫合のみ実施した症例の一部に再発が認められ、改めて実施したフラップ形成の成績も低下した。犬歯を抜歯せず歯根部の清掃のみ行なった症例では短い期間で症状の再発を認めた。これらのことから、口腔鼻腔瘻に対しては初回治療から抜歯と適切なフラップによる瘻管の閉鎖が実施されるべきであることが示された。

次に、ミニチュアダックスフンドの口腔鼻腔瘻の好発要因の探索として、ミニチュアダックスフンドと他犬種でそれぞれの歯周病の進行パターンを評価するために、歯周病と口腔鼻腔瘻の症例の回顧的な研究から、上顎犬歯口蓋側の歯周病の悪化を反映する実測値である歯周ポケット深度の変化に伴う上顎犬歯の歯科 X 線画像所見の変化を調査した。上顎犬歯を側面から撮影した画

像において、口腔鼻腔瘻の形成される犬歯口蓋側の薄い歯槽骨は歯根の像と重なり評価ができないが、犬歯の近心および遠心の歯槽骨吸収像と、犬歯口蓋側に存在し、重度の歯槽骨吸収で明瞭度が低下するホワイトラインと呼ばれる所見は評価することができると考えられた。

犬歯近心および遠心の吸収像をみると、ミニチュアダックスフンドは他犬種と比較して口蓋側歯周ポケット 6-7 mm の段階では犬歯近心および遠心に現れる吸収像が少なく、8-9 mm 以上になると他犬種と同程度の吸収像が観察された。口腔鼻腔瘻の症例でもミニチュアダックスフンドの歯槽骨吸収像が少なかった。また、ホワイトラインの明瞭度も歯周ポケット 8-9 mm でミニチュアダックスフンドは他犬種よりも明瞭である割合が高く、口腔鼻腔瘻の症例においても他犬種よりも明瞭である割合が高かった。これらの画像所見の変化から、ミニチュアダックスフンドの上顎犬歯歯周病は口蓋側から始まり、狭い範囲で進行するパターンをとる可能性が示唆された。

口腔鼻腔瘻が歯周病の転帰として発症することから、歯周病による歯槽骨吸収の進行速度やその範囲が口腔鼻腔瘻の好発要因に関わる可能性が疑われたが、本研究によって犬歯歯周病の悪化に伴う歯槽骨吸収が広範になることがミニチュアダックスフンドの口腔鼻腔瘻の好発要因である可能性が低いことが示唆された。